

優秀賞 山形県 松本 由美子 様（50代 女性）

遺族年金を受け取り 18 年になる。夫が他界し、18 年。釣りの事故で、3 日目に遺体が発見された。それでも帰ってきてくれたことに喜び、かけ寄ったが、次の瞬間喜んでいられなかったことを思い知らされ、泣くしかなかった。当時、2 人目を妊娠し 5 か月であった。事故当日、妊娠中であることを気遣ってもらい、現場近くの警察署の 2 階の部屋で 1 人待っていた。じっとうずくまっていた時、初の胎動を感じた。こんな時に、こんな時だから？けれど、この子より夫。流産しても、夫の方が・・・と、ばかり思っていた。それなのに・・・。子供を車に乗せて運転していると、「このまま道路の壁にぶつかれば、後は何も考えなくていいかな」と思ったりもした。

葬式後、私は、息子は、お腹の子はこれからどこで生活をするのか、どうするのか。いろいろな手続きの中に遺族年金があった。そのうち何の知識もない私の通帳に振り込まれるようになった。2 人目が生まれると、その子の分も加算され振り込まれてきた。そうか、お腹にいたからこの子の分もあるのかと、遺族年金のありがたさを知った。

あれから 18 年にもなる。現在、高校 3 年生の娘に大学 3 年の息子。子供に父の記憶はなく、どう思っているのか、聞くこともできないで過ごしてきている。

しかし、娘と一緒にのところを知人が見かけると、「こんなに大きくなったのかあ。お腹にいたっけのにねえ」と声をかけてくれる。娘は、知らない人だなあと思っているだろうが、私は「18 年にもなるんです。こんなに大きくなったんです」と答える。そんな時、娘は父を感じているのかもしれない。

息子が東京に住むようになり、学費や生活費にこれまでの遺族年金を使っている。遺族年金があったからこそ、大学に進むことができています。高校 3 年の娘は、これから進路を決めることになるが、やはり遺族年金があるからこそ、希望をかなえてあげることができ、あきらめることなく進めるのである。子供 2 人は、父がいたことの証しを 18 年過ぎた今、強く感じているのである。

今、私は年金の仕事をしている。遺族年金受給者であり、年金に感謝し過ごしている私にとって、「年金は大事なもの」を伝えられるようにと仕事に取り組んでいる。年金は、決して老後だけではなく、私のように「ええっ！」と思ったあの時から年金に助けられることもあるのである。もちろん、そんなことがなければ一番よかったのだが。

年金に対しては、「そんな…」とか「どうせ…」という言葉がつきがちではあるが、私のように救われるものもいるのである。どうか、自分に関係ないと思わないでほしい。

「100%ありえない」などということはないのだから、このしくみのありがたさを知ってほしい。私が今まで、過ごしてこられたことの一つは、間違いなく年金の支えがあったからである。そして、今後もである。